

このたび、音声障害の研究と臨床の基礎を築かれてきた廣瀬肇先生が『音声障害治療学』を上梓された。廣瀬先生は、音声治療を担当する言語聴覚士の育成にも長年力を尽くされてきた。本書においても、言語聴覚士として音声障害の治療・研究に長年取り組んでこられた城本修先生、生井友紀子先生が音声治療（行動学的治療）の理論と臨床について担当している。本書出版の意図が言語聴覚士の音声治療の普及とその技術向上にあることがうかがえる。

本書の特徴は音声障害の治療に力点を置いていることである。音声障害の治療は、医学的治療と音声治療の両者の特徴と適応をよく理解して行う必要がある。医学的治療に関しては、多くの教科書で詳しく述べられているが、音声治療について詳述した教科書は少ない。本書では、廣瀬先生が医学的基礎・治療、評価から治療までの流れを簡潔に記述され、城本、生井両先生が記述した音声治療（行動学的治療）について多くのページが割かれている。

また、本書では機能性音声障害という声帯に器質的病変や運動障害を有しない音声障害、すなわち発声法や発声習慣に問題を有する音声障害に対する音声治療を中心に記述されている。音声治療の基本は運動学習であり、運動学習理論に基づくものである。本書の中でも述べられているように、運動学習が維持されるには週3～5日の訓練が必要とされて

いるが、現実の臨床では週1～2回となっており、時間的に十分な音声治療が実施されているとはいえないのが現状である。効果的な音声治療を実施するには、音声障害のタイプや重症度によって異なるが、週3～5回は実施することの必要性が示唆されている。本書に記述された音声治療の内容は、機能性音声障害以外の運動障害性構音障害や全身の状態の変化による音声障害（男性化音声、加齢性音声障害など）、喉頭手術の治療前後にも適応できる内容となっている。

音声障害を主な対象とし、実際に音声治療を実施している言語聴覚士は少ない。しかし、高齢社会を迎え、加齢性音声障害の数は急増している。高齢者の社会参加の促進が叫ばれている本邦において重要な課題である。また、従来その取り組みの重要性が叫ばれている生活習慣による音声障害（声帯結節、ポリープ様声帯など）の予防、運動障害性構音障害における音声の問題という観点からの音声治療も今後言語聴覚士が取り組むべき課題である。

多くの言語聴覚士が本書を読んで、音声障害で苦しむ方々の治療に取り組んでいただくことを強く希望する。

（B5・頁208 2018年10月 定価：本体5,000円＋税
[ISBN978-4-260-03540-8] 医学書院刊）